

もうひとつの人類史

——歴史の詩的転回——

②

3. 歴史の誕生

3-1. 人間誕生の神話（忘却とともに）

人間をつくったプロメテウス（先んじて知る者）は、アポロンから火を、アテナから言葉を盗んで、人間に武器として与えた。

- 人間が与えられた武器は、鷹の爪や、蛇の毒、獅子の牙ではなく、作り、語らなければあらわれないもの。すなわち、《知恵》と《技術》。人間のもつ、大脳と手（直立二足歩行）の身体的特徴がもたらす問題。

Cf. オイディプスの神話

美しい婦人の頭と獅子の胴をもつ怪物スフィンクスを倒した者は、主権者ライオス不在の王国テーバイと寡婦となった王妃イオカステを授けられる。それを聞いたコリントス王夫妻の拾い児オイディプスは怪物の許へ向かう。怪物は問うた。「わたくしを悩ます者がおります。朝は四本、昼間は二本、日暮れには三本の足をもつ怪物です。あの者たちのために、おちおち夜も眠れぬのです。お前はあれが何者か知っていますか？」 答えはあまりに有名である。すなわち、人間。この答えを聞いた彼女は、おのれの方が怪物であることを悟り、恥辱のあまり死んでしまった。オイディプスは約束どおり国と寡婦とを授けられる。彼女が自分の母親であるのを知るのはまだ先のことである。……

- フロイトが、ここから「エディプス・コンプレックス」の概念を創造したことは有名。
- 杖（テクノロジー）なしには生を全うできぬ人間。
もしかしたら、スフィンクスは、「わたくしを怪物と呼ぶお前たちも同族でないと、どうしていえるでしょうか」というかもしれない。

怒ったゼウスは人間に災厄の種を与える。アフロディテの美とヘルメスの狡知とをあわせもった、《女》である。「人間どもはみな、おのれの災厄を抱き慈しみつつ、喜び楽しむことであろうぞ」。パンドラと名付けられた《女》はプロメテウスの弟、エピメテウス（後から気づく者）に与えられる。パンドラは家に伝わる瓶を開け、ありとあらゆる災厄が地上にばらまかれる。これをみたゼウスは人間を大洪水で滅ぼしてしまった。最後に残されたのは、プロメテウスの息子デウカリオンと、エピメテウスとパンドラの娘、ピュラだけであった。母パンドラの骨を抱えて嘆き悲しむ二人に神託が降りた。「神殿を出でよ。頭をおおって、帯で結んだ衣を解くように。そして大いなる母の骨を背後に投げよ」（オウイディウス『変身物語』）。大地に打ち捨てられた母の骨（に擬せられた石）は、背後で肉に包まれ、彼らの子供（ヘレン）となった。……

- 洪水で滅ぶたびに生まれ変わる、人間の何度目かの誕生の神話。最初人間は、^{プロメテウス}記憶の神と^{エピメテウス}忘却の神の血をひく子であった。
- 母の骨（歴史の資料）を集め、そしてそれを背後に投げ捨てて前に歩むとき、その背後に歴史と子供とが生まれる。記憶と忘却の不思議な連鎖のなかで、歴史と人間とは同時に誕生する。

3-2. イシスとオシリス（想像力の歴史的可能性）

かつて、エジプトの神オシリスはセトの謀略にかかり、木の棺に納められたまま鉛を流し込まれ、ナイル川に流されることになった。妻であり妹でもあるイシスは心を痛めて彼を捜す。棺はフェニキア王の街ビュブロスに流れ着き、無花果の木に包まれて宮殿の柱となっていた。イシスはついに彼の棺をみつけだす。「やっと人気のない所まで来ると、彼女は自分一人になって棺を開き、オシリスの顔に自分の顔をすり寄せ、彼を愛撫して涙をこぼしました」。イシスは強力な魔力をもつ魔女であり、生を司る彼女は死者を再生することができた。それをみたセトは、イシスの魔術を妨害するため、オシリスの遺体を奪い十四の部分に分断してナイル川に流した。イシスはパピルスの船にのり、またも遺体を探しまわって、魚にすでに食べられていた男根をのぞいて十三の部分のみつけだす。最後の部分は無花果の木で代用した。そのため完全な再生にはいたらなかったものの、イシスは処女のままオシリスの子ホルスを懐胎し、オシリス自身は今度は冥界アアルの王として蘇ることになった……。

- ビュブロス Byblos はアルファベットが生まれた場所とされる。また、パピルス（Papyrus 紙）およびバイブル（Bible 聖書）の語源。（＝つまり歴史に必要な文字と紙という条件が揃っている。）
- オシリスのバラバラにされた肉体＝歴史の史料。最後のピースを埋めるのは、詩的想像力。それによって、オシリスは冥界の王＝歴史上の人物として甦る……。
- セトの謀略……学問における《分析》。イシスの彷徨……学問における《総合》。史料を集め、分析し、そしてそれらを総合して歴史を再現する。歴史学者の行為を象徴するかのような、女神イシスの冒険。
- 神話の個々の内容が歴史的事実を表しているというより、神話の内容それ自身が、歴史という概念の誕生を表している。

3-3. ホメロス『イーリアス』

彼の名のもとに伝わる『イーリアス』の成立年代は前 750 年頃か。紀元前 1200 年頃に行なわれたギリシア人たちの小アジアはイーリオスへの 10 年に渡る遠征、いわゆるトロイア戦争を描いた叙事詩。前 6 世紀後半、アテナイで文字化。「怒りを歌え、女神（ムーサ）よ、ペレウスの子アキレウスの——アカイア勢に数知れぬ苦難をもたらし、あまた勇士らの猛き魂を冥府の王（アイデス）に投げ与え、その亡骸は群がる野犬野鳥の啖（くら）うにまかせたかの呪うべき怒りを」の言葉で始まる全 24 歌で構成される。

- 神話世界を描いたとされることが多かったが、ハインリヒ・シュリーマンによって 1873 年に発掘されたヒサルルクの丘の遺跡や遺物から、歴史的事実として注目されるようになる。散文で書かれた、ペルシア戦争を描いたヘロドトス、ペロポネソス戦争を描いたトゥキュディデスに匹敵する歴史叙述として、トロイア戦争を謳う叙事詩『イーリアス』をあえて捉えてみる。

◇ 神々の後退

さてそのディオメデスは、仮借なき槍をかざしてキュプリス（アプロディテ）に迫るところであったが、めざす相手は力の弱い女神で、男の子らの戦いに立ち交って采配をふるう、アテネあるいは都城を屠るエニュオの如き女神ではないと見抜いていた。群がる軍兵の間を追って遂に追いつくと、豪毅の勇士テュデウスの子は、身を伸ばして躍りかかり、鋭い槍で柔肌の腕の先を突いた。たちまち槍は、優雅の女神たちがみずから仕立てた、この世ならぬ神の衣を貫いて、掌の付け根辺りの膚を切り裂き、神の不死なる血が流れ出た——その血とはすなわち至福なる神々の体内をめぐる^{イコル}霊血のこと、神々は穀物の類いを口にせず、きらめく酒を呑むこともない。さればこそ神々には並みの血は流れておらず、不死なるものと呼ばれもする。

◇ 運命との戦い／戦いの運命

「剛勇アキレウスよ、いかにもわれらはこのたびはまだあなたの身をお守りしましょう、ですがあなたの最期の日の間近に迫っているのです。それもわれらのせいではなく、偉大なる神と強力な運命の女神のなさること、それにまた、トロイエ勢がパトロクロスの肩から武具を剥いだのも、われらの動きが鈍かったためでも怠慢のせいでもなく、髪美しいレトのお産みなされた、神々の中でも特に優れた神が前線で討ち取り、ヘクトルに功名をたてさせられたのです。われらは最も脚の速いといわれる西風^{ゼピュロス}とでも速さを競うことができるつもり。つまり、さる神とさる勇士との手にかかって最期を遂げるのは、あなた御自身に定められた運命なのです。」

「クサントスよ、どうしてわたしに死を予言したりする。要らざることだ。わたしが父母から離れたこの地で果てる運命にあることは、自分でよく承知している。とはいえ、トロイエ勢に嫌というほど戦いの苦汁を味わわせるまでは、わたしはやめぬぞ。」

- 母テティスの予言（アキレウスが参加すればアカイア勢が勝つが、アキレウスは死ぬ）を実現すべく戦う英雄アキレウス。彼は運命に抗えぬことを知りながら、神の手を借りず、おのれの手で運命を実現しようと戦う。戦いに先行する母の言葉……。
- ある意味では幼児のように、さもなければ言葉と現実の区別がつかぬ分裂症患者のように、アキレウスは母の言葉を真実と信じている。
- 詩人ホメロスにとって、歴史を動かすものはなにか。戦いでもなければ、ましてや経済でもない。

4. 詩としての歴史

4-1. ヘロドトス、英雄時代最後のひと

ハリカルナッソス島出身、僭主政治に反対しリュグダミスを追放後、市民の妬みを恐れてサモス島に亡命。ペルシア・エジプトを旅したのち、アテナイに滞在、前444年に南イタリアのトゥリオイに移住。そこで死去（アテナイで逝去の説もある）。ペルシア戦争（前490、前480～479）の顛末を描いた『歴史』により、「歴史の父」と呼ばれる。

◇ アリストテレスにおける詩と歴史の区別（『詩学』）

歴史家と詩人は、韻文で語るか否かという点に差異があるのではなくて——じじつ、ヘロドトスの作品は韻文にすることができるが、しかし韻律の有無にかかわらず、歴史であることにいささかの変わりもない——、歴史家はすでに起こったことを語り、詩人は起こる可能性のあることを語るという点に差異があるからである。

- 詩と歴史の違いはわずか。今日のように虚構と真実との区別と重ならない。また、ローマ時代の批評家ロンギノスは、ホメロス以後、もっともホメロ斯的であるとされている文学者として、ヘロドトスをあげている。

◇ 人間を導く《夢》、《神託》、《予言》

【リュディア王クロイソスとソロンの対話、運命について】 1,30-32

- すべては「偶然」。歴史の必然を強烈に批判するソロンの言葉が歴史の冒頭に置かれることの意味。

【ペルシア皇帝キュロスの勢力が拡大するに及び、クロイソスはそれを打倒すべく、神託をうかがう】 1,46-56

【ギリシア遠征に反対したアルタバノスとギリシア遠征を中止しようとしたクセルクセスがみた夢】 7,12-19

【クセルクセスの攻撃に晒されるアテナイの運命、デルポイの神託】 7,140-141

【ペルシア敗北、遷都を進める言葉に対するキュロスの古い忠告が事実となる】 9,122

→ 妖しげな伝承を語るに臆さないヘロドトスは、古典時代から「嘘吐き」といわれる。しかし、歴史学者が古い歴史学者の論駁に成功するとき、古い歴史はすべて嘘になっていくなから、いったい歴史学者が真実を語ることは可能だろうか？（人間の語る言葉は、まったくの嘘であることも、事実であることもできない）

→ 夢、神話、予言が要所要所に配置され、それらが出来事と出来事、点と点を繋げる線になる。これらの怪しげな、神懸かりの言葉が、偶然のうちに運命の糸となって、真実の出来事となっていく。

→ 現在から過去を見渡す近代の反省的な因果律の探究とは異なる、歴史の探究の仕方。過去に偶然に語られた言葉が、不思議な運命のなかで現在に実現し、歴史を描くという、そうした歴史叙述。

運命の糸に抵抗し、ときに乗り越えようと努力した英雄時代の《物語》ではなく、いかにして運命の女神の意に寄り添うかという、民衆の時代、青銅と鉄の時代の《歴史》。

4-2. トウキュディデス、人間時代最初の歴史家

アテナイ市民。ペロポネソス戦争（前 432～前 404）中にたびたび軍役を経験。アンフィリポリスの遠征では將軍として軍隊を指揮するもスパルタに敗北、20 年間亡命。アテナイ敗北（前 404）後に同市に帰国、そこで死去。近代歴史学の父とされるレオポルト・フォン・ランケは、トウキュディデスを高く評価。

◇ 同時代史と正確な事実

アテナイ人トウキュディデスは、ペロポネソス人とアテナイ人とが互いに争った戦の様相をつづった。筆者は開戦劈頭いらい、この戦乱が史上特筆に値する大事件に展開することを予測して、ただちに記述を始めた。当初、両陣営ともに戦備万端満潮に達して戦闘状態に突入したこと、また残余のギリシア世界もあるいはただちに、あるいは参戦の時機をうかがいながら、敵味方の陣営に分かれていくのを見たこと、この二つが筆者の予測を強めたのである。(1,1,1) 戦争において起こった事績について、偶々そこに居合わせた人から仕入れた知見を事実として記述することをよしとせず、また自分の主観的類推でこれを記述することもせず、自分が目撃者であった場合も、他の人たちから知見を得た場合も、事柄の一つ一つにできるだけ正確に検討を加えて記述することを重視した。…私の著述には神話伝承が含まれていないため、耳にしても面白くないと思われるかもしれない。(1,22,3-4)

→ ギリシア全土に荒廃をもたらしたペロポネソス戦争を描く（未完）。ヘロドトスの『歴史』のアクセントになっていた夢や神話、予言はほとんど出てこない。アクセントは、人間が人間に語る《演説》。

◇ ペロポネソス戦争の「原因」

この大戦は、アテナイ人とペロポネソス人が、エウボイア島攻略ののち両者のあいだに発効した和約を破棄したとき、はじめた。私は、まずこの和約破棄にいたらしめた原因を問ひ、両者の紛争の記述からはじめ、ギリシア人を襲ったこの大動乱の原因を後日追究する人の労をはぶきたい。というわけは、この事件の真の原因は、一般におこなわれている説明によっては、捕捉されがたい性質をもつからである。あえて筆者の考えを述べると、アテナイ人の勢力が拡大し、ラケダイモン人に恐怖をあたえたので、やむなくラケダイモン人は開戦にふみきったのである。1,23

→ E・H・カーは「歴史の研究は原因の研究だ」（『歴史とは何か』）と主張。しかし、ヘロドトスやトウキュディデスの叙述に、「原因」は冒頭でわずかに語られるのみ（近代史学において、「原因」は経済（階級闘争）、軍事力、権力闘争で説明される。近代的な因果関係を満足させる記述はあらわれない）。

◇ 人間が人間を導く《演説》

【ペロポネソス戦争での最初の死者を弔うペリクレス】 2,35

【アルキビヤデスの演説】 6,15-18

- 壮麗かつ華美を極めたシケリア遠征（前 415～413）が民会において可決される。弁舌爽やかな美貌の政治家アルキビヤデスの演説により、ニキアスの反対演説は封じられ、民衆はこの遠征を圧倒的多数かつ狂熱的に支持した。しかし遠征直前に起こったヘルメス像損壊事件により彼は失脚後スパルタに亡命。皮肉にも、彼の政敵ニキアスが軍を率いることになるも、勝機を逸して極度の困窮に陥ることになる。
- 民主政治を称える清冽な《演説》。正義の言葉がアテナイ人をして自ら泥沼の戦争に追い込む。将軍の《激励》。勝敗にかかわらず、兵士は将軍たちのときに説得的な、ときに情に訴えかける言葉に鼓舞され、死ぬまで戦うのをやめることができない。最後は、民衆の圧倒的な支持を集めたシケリア遠征において、アテナイは同じ民主政国家を攻撃する矛盾を犯して凄絶な敗北を遂げる。美しい理に適った言葉が人間を追い立て、再帰不能になるまで戦いつづける姿が淡々と描かれている。
- 人間の用いる言葉（ロゴス）が、その正しさによっておのれを破滅に導くという、不可解な因果連鎖。近代人でさえ論駁困難なペリクレスの優れた演説のために、アテナイは再起不能になった、といったところで、論理的にはあからさまに飛躍している。アリストテレス的な矛盾律でもヘーゲル的な弁証法でもないこの非-論理が、歴史のなかでは奇妙に成立してしまう。言葉ゆえに、彼らの戦いはますます「悲劇」的な調子を帯びる。彼にもまた、《運命》をあつかうホメロスの血液が流れているのを感じることができる。

5. 言葉と歴史

戦いに優越する言葉。戦士に優越する詩人。歴史を動かすのは、戦いでも経済でもなく、言葉。言葉に対する執着が、古代人には存在している。近代人が《経済》を読み解くのと同じくらいに、予言者の言葉に聞き入り、また修辞学や弁論術にいそしんで、おのれを言葉で磨いた。因果律は経済や肉体的な戦いのような、客観的対象物ではなく、人間の発した言葉そのものによって、紡がれていく。言葉＝詩としての歴史の可能性。

ホメロス『イリアス』（松平千秋訳、岩波文庫）

【ヘクトールの父、プリアモス王とアキレウスの対面】 第 24 歌

アキレウスは神に見まごうプリアモスの姿を見て仰天した。…アキレウスは老王の手を取り、静かに押しやって、わが身から離れさせた。こうして二人はそれぞれの思いを胸に、こちらはアキレウスの足下に腹這いになって、勇猛ヘクトールのためにさめぎめと泣き、アキレウスはわが父を、またパトロクロスをと代わる代わるに偲んで泣いて、二人の泣き声は陣屋中に響きわたった。勇将アキレウスはやがて心ゆくばかり泣き、気持ちからも体からも悲嘆の情が消え去ると、つと椅子から立ち上がり、老王の白くなった頭と髯とを憐れみつつ、その手を取って起こしてやり、翼ある言葉をかけていうには、「なんと気の毒な、あなたもその心中にさまざまな不幸を忍んでこられたのだな。それにしてもよくもまあ思い切って、単身アカイア勢の船に足を運び、多数の優れた御子息を殺めた

男の目の前に出てこられたものだ。あなたの心は鉄のようだな。まあ椅子にお掛けになるがよい。苦しいことごとは、辛いことではあるが、胸の内にそっと寝かせておきましょう。心を凍らす悲しみに暮れたとて、どうにもなるものではない。そのように神々は哀れな人間どもに、苦しみつつ生きるように運命の糸を紡がれたのだ——御自身にはなんの憂いもないくせに。…神々は父ペレウスにも、生れながらにしてくさぐさの見事な贈物を下された。仕合せということでも富でも万人に優り、ミュルミドネス人の王となり、しかも人間の身である彼に、女神が妻に与えられた。しかしそういう父にも、神は善からぬことを一つ下された——父には家に王位を継ぐべき子が生れず、儲けたたった一人の息子は時ならず世を去る運命にある。

ヘロドトス『歴史』（松平千秋訳、岩波文庫）

【リュディア王クロイソスとソロンの対話、運命について】 1,30-32

〔 クロイソスは七賢人のひとり、アテナイのソロンに世界で一番仕合せな人間は誰かと尋ねた、彼がクロイソスと答えることに期待して。しかしソロンは、庶民の名をあげるばかりでクロイソスの名はついぞ口にしない。 〕

「アテナイの客人よ、そなたが私をそのような庶民の者どもにも及ばぬとしたところを見ると、そなたは私のこの幸福は何の価値もないと、思われるのか。」

ソロンが答えていうに、

「クロイソス王よ、あなたは私に人間の運命ということについてお訊ねでござりますが、私は神と申すものが嫉み深く、人間を困らすことのお好きなのをよく承知いたしております。人間は長い期間の間には、いろいろと見たくないものでも見ねばならず、遭いたくないことにも遭わねばなりません。人間の一生をかりに七十年といたしましょう。七十年を日に直せば、閏月はないものとしても二万五千二百日になります。もし四季の推移を暦に合わせるために、一年おぎに一月だけ長めるといたしますと、七十年間に三十五か月の閏月が入ることになり、これを日に直せば千五十日となります。さてこの七十年間の合計二万六千二百五十日の内、一日として全く同じ事が起こるということとはございませぬ。さればクロイソス王よ、人間の生涯はすべてこれ偶然なのでございます。…」

【ペルシア皇帝キュロスの勢力が拡大するに及び、クロイソスはそれを打倒すべく、神託をうかがう】 1,46-56

〔 クロイソスはどの地の神託が正確か、使者を派遣して、使者が発って百日後の自分の行為を言い当てるか試した。多くの神託所のなかで、言い当てたのはデルポイだった。そこで出兵の是非を問うと、ロクシアスの予言として巫女は次のように言った。 〕

クロイソスがペルシアに出兵すれば、大帝国を亡ぼすことになろうといい、ギリシアの中で最強の国はいずれの国々であるかを調べ、これを同盟国とするよう勧告したのである。クロイソスは使者の復命した宣託を聞くと大いに喜んだ。…クロイソスが自分の王権が永続するかどうかを神に訊ねたのに対し、デルポイの巫女は次のように宣託を下した。

されど驃馬がメディアの王になったらば、

足柔のリュディア人よ、その時は礫も多のヘルモス河に沿うて逃れ止まることなかれ、臆病者の名を恥ずることも要らぬぞよ。

【ギリシア遠征に反対したアルタパノスとギリシア遠征を中止しようとしたクセルクセスがみた夢】 7,12-19

その夜彼はこんな夢を見たという。眉目秀麗の偉丈夫がクセルクセスの枕もとに立ってこういったのである。

「ペルシア王よ、そなたは兵を集めるとペルシア人たちに公言しておきながら、心変わりしてギリシア遠征を中止するおつもりか。そのような心変わりはそなたのためにもならず、今ここに参った私もそれを許さぬぞ。昨日の昼間計画せられたとおりになされて、ひたすらその満ちを進まれよ」

…夜ふたたび、クセルクセスの夢枕に前夜と同じ姿が現われていうには、

「ダレイオスのお子よ、そなたはペルシア人の面前で公然と遠征の中止を宣言し、私の申したところをあたかもとるに足らぬ者のごとく無視されたな。しかしよく承知しておかれるがよい。もしただちに遠征を行なわぬならば、その結果はかならずこうなる。すな

わちそなたが勢威の地位に上ったのも速かったが、こんどはたちまちに顛落の憂き目にあうであろうぞ」

…

アルタバノスは…クセルクセスの衣装を身につけ、王の玉座に坐った後就寝したが、やがて眠りに落ちるとクセルクセスを訪れたと同じ夢の姿が現われ、アルタバノスの枕もとに立ってこういった。

「クセルクセスのギリシア遠征をさも彼の身を案ずるかのごとく装って中止させようとしているのはおまえだな。将来といわず現在といわず、事の必然の流れをそらそうとすればろくなことはないぞ。クセルクセスが私の命に従わぬ場合どのような目にあわねばならぬかは、すでに彼に示しておいてある」

アルタバノスの夢に現われた姿は、このように威嚇すると、赤熱した鉄で彼の両眼を焼きえぐろうとした。

【クセルクセスの攻撃に晒されるアテナイの運命、デルポイの神託】 7,140-141

「憐れなる者どもよ、なにゆえにここに坐っておるのじゃ。家屋敷も、輪形の町のそびえ立つ頂きも捨てて、地の涯に逃れよ。頭も胴体も無事にはすまぬ、足のつま先、また手も胴も余すところなく滅びゆくぞ。町は火に焼かれ、シリアの車を駆って進みくるだけしき軍の神に踏みにじられる。軍の神の手に滅びゆく累城は数を知らず、ひとりそなたらの城のみではない。またその神により劫火に委ねらるべきあまたの神殿は、すでにいま恐怖に戦いて汗をしたたらせ、その天井からは逃るべくもない災厄を告げる黒い血があふれ落ちている。

さればそなたらはこの社殿を去り、心ゆくまで悲嘆に暮れよ」

…

「パラス（アテナ）がいかほど言葉を費やし、賢しき才覚を用いて嘆願しようとも、オリュンポスなるゼウスのみ心を動かすことはかなわぬぞ。されどわれはここにふたたびなんじのため綱にも比すべき硬く破れぬ言葉を告げてとらせよう。ケクロプスの丘とキタイロンの谷の間に抱かれる土地がことごとく敵の手に陥るとき、はるかに見はるかしたもうゼウスはトリトゲネス（アテナ）がために木の砦をば、唯一不落の壘となし、なんじとなんじの子らを救うべく賜わるであろうぞ。またなんじは、陸路迫りくる騎兵の群れ、歩兵の大軍を安閑として待つてはならぬ。背をひるがえして退避せよ。やがてまた反撃に立ちむかうときもあろうぞ。おお聖なるサラミスよ、デメテルの賜物の蒔かれるとき、あるいはその穫入のときに、そなたは女らの子らを滅ぼすであろう」

トウキュディデス『戦史』（松平千秋訳、岩波文庫）

【ペロポネソス戦争での最初の死者を弔うペリクレス】 2,35-46

「われらの政体は他国の制度を追従するものではない。ひとの理想を追うのではなく、ひとをしてわが範に習わしめるものである。その名は、少数者の独占を排し多数者の公平を守ることを旨として、民主政治と呼ばれる。わが国においては、個人間に紛争が生ずれば、法律の定めによってすべての人に平等な発言がみとめられる。だが一個人が才能の秀でていることが世にわかれば、輪番制に立つ平等を排し世人のみとめるその人の能力に応じて、公に高い地位を授けられる。またたとえ貧窮に身を起こそうとも、国に益なす力をもつならば、貧しきゆえに道を閉ざされることはない。われらはあくまでも自由に公につくす道を持ち、また日々にたがいに猜疑の目を恐れることなく自由な生活を享受している。よし隣人がおのれの楽しみを求めても、これを怒ったり、あるいは実害なしとはいえず不快を催すような冷視を浴びせることはしない。…

…われらはなんびとにたいしても都を開放し、けっして異国の人々を逐い払ったことはなく、学問であれ見物であれ、知識を人に拒んだためしはない。敵に見られては損をする、という考えをわれらはもっていないのだ。なぜかと言えば、われらが力と頼むのは、戦いの仕掛けや虚構ではなく、事を成さんとすわれら自身の敢然たる意欲をおいてほかにないからである。

まとめて言えば、われらの国全体はギリシアが追うべき理想の顕現であり、われら一人一人の市民は、人生の広い諸活動に通曉し、自由人の品位を持ち、おのれの知性の円熟を期することができると思う。そしてこれがたんなるこの場の高言ではなく、事実をふまえた真実である証拠は、かくのごとき人間の力によってわれらが築いた国の力が遺憾なく示している。…

われらを称えるホメロスはあらわれずともよい。言葉のあやで耳を奪うが、真実の光のもとに虚像を暴露するがごとき詩人の助けを求めずともよい。われらはおのれの果敢さによって、すべての海、すべての陸に道をうちひらき、地上のすみずみにいたるまで悲しみと喜びを永久にとどめる記念の塚を残している。…」

【アルキピアデスの演説】 6,15-18（城江良和訳）

遠征軍派遣を最も熱心に唱えたのは、クレイニアスの子アルキピアデスであった。…何よりも彼を駆り立てたのは、遠征軍の司令官となつて、シケリアとカルケドンを奪い取りたいという欲望であり、遠征に成功して自らの富と名声を大きくしたいという願望であった。アルキピアデスは市民たちから大きな声望を得る地位にあったが、所有している資産を越える欲望に取り付かれ、馬の飼育などに財産を蕩尽していたのである。そしてこれこそが、後にアテナイ人の国家を崩壊に追いやる元凶になったのである。というのは、個人的な場面で彼が見せる異常なほどに自墮落の生活態度や、どんなことであれ彼が行動するときに必ず示す並はずれた知的能力を目の当たりにして、危惧を覚えた一般民衆は、彼に僭主の座への野心ありと考えて、敵に回ったのである。そして公職にあるときは戦争遂行に優れた手腕を発揮しながら、別の人物の手に国政を委ねた結果、ほどなくして国家を破滅させたのである。さてそのとき、アルキピアデスは進み出ると、アテナイ人に次のように勧告した。

「アテナイ人諸君、私は他の誰にもまして遠征軍の指揮をとるにふさわしい人間である。…私の若さと、自然の粋がはずれたかのような無分別についても、実のところそれがあればこそ、強大なペロポネソス諸国を相手に、巧妙な言葉で会談に臨み、情熱によって信頼を勝ち得て、説得したのだ。だから今度も、そのことで心配しないでほしい。…遠征は決行すべきである。そうして、アテナイは現在の平穩に飽き足らず、シケリアにまで艦隊を進めたという評判が広まれば、ペロポネソス諸国の戦意を挫くことができるだろう。そればかりか、あの島が吾々の勢力圏に加わったときには、吾々は間違いなく全ギリシアを支配下に収めることになるだろう。…諸君は、ニキアスの語った無為の勧めや、若者と老人を仲たがわせようとする企みに、惑わされてはならない。…国家というものは、平穩に時を過ごしていると、すべてがそうであるように、それ自体で擦れ合って摩滅してしまい、あらゆる技能も老化してしまうが、しかし争いを続けていると、次々に新たな経験を獲得し、言葉ではなく行動によって自らを守る習慣を身につけるといふことも忘れてはならない。要するに、私の見るところでは、活動することしか知らない国家を崩壊させる最短の道は、活動を停止させることであり、最も安全な生活を送る国民とは、持ち前の習慣や伝統に欠陥があつても、それに最も忠実な政治をおこなう国民なのである。」

【窮地に陥ったアテナイ】 7,55

こうしてシュラクサイ勢が、今やその海軍によつても、堂々たる勝利をとげるに及んで（それまでは、シュラクサイ側はデモステネスが率いて来攻した船隊を恐れていたのであるが）、アテナイ側将士の落胆はおおうべくもなく、かれらの予想は大きく裏切られたが、しかしそのいずれにもまさつて、この遠征挙行を後悔する気持ちがつよくかれらを捕えた。

というのは、かれらがこれまでに兵をすすめた諸国の中で、ただこれらのシケリア諸邦のみが、アテナイと類似の体質を有する国々であつたことによる。つまり、これらはアテナイと同じく民主政治の国家を営み、軍船、騎馬をはじめとする軍備もすこぶる大であるために、アテナイ側がこれを攻めるにさいしても、相手国の政体革新を餌に国内の反政府分子を武器として利用する、という常套手段をもちいておのが意にしたがわしめることもならず、さりとて圧倒的な兵力投入によつてもことは成らなかつた。それのみかほとんどすべての策は破れ、それ以前よりすでに窮していたところへ、さらに海戦においてさえ勝利を奪われるという、およそ予想だにならなかつた事態が現実になるにいたつて、アテナイ側の困窮たるや、もはやそれまでの比ではなくなつたのである。